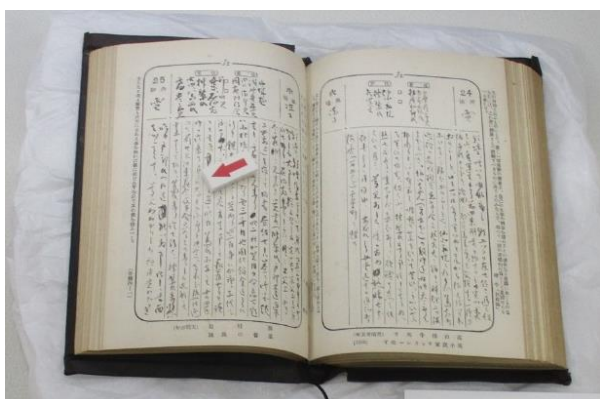


スペイン風邪

スペイン風邪とは、1918年に流行したインフルエンザのこと。第一波は1918年の3月に米国とヨーロッパにて始まるが、この（北半球の）春と夏に発生した第一波は感染性は高かったものの、特に致死性ではなかったとされている。しかしながら、晩秋からフランス、シエラレオネ、米国で同時に始まった第二波は10倍の致死率となり、しかも15～35歳の健康な若年者層においてもっとも多くの死亡者となり、死亡例の99%が65歳以下の年齢層に発生したという、過去にも、またそれ以降にも例のみられない現象が確認されている。また、これに引き続いて、（北半球の）冬である1919年の始めに第三波が起こっており、一年のタイムスパンで3回の流行がみられたことになる。これらの原因については多くの議論があるが、これらの原因については残念ながらよくわかっていない。

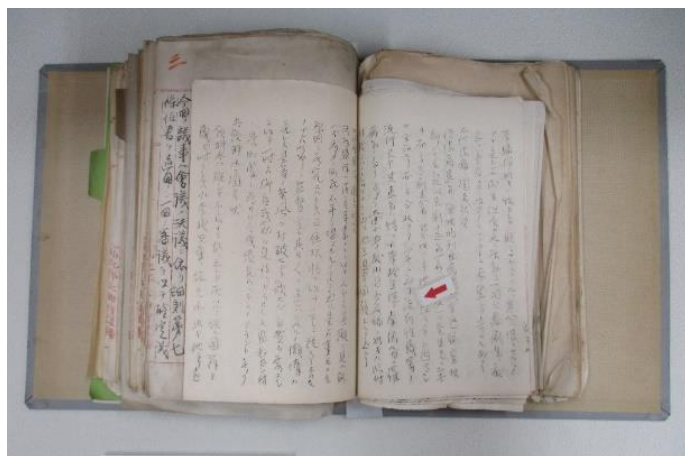
参考：「インフルエンザ・パンデミックに関するQ&A」（国立感染症研究所ホームページ）
<http://idsc.nih.go.jp/disease/influenza/pandemic/QA02.html>



十二月二十五日（水）
朝凍る、朝咳依然としてい
で、身体の具合おもしろか
らざりしも大事を控えり
し為、先づ本家父上を見舞
ひて帰り：（中略）：それよ
り遂に臥床、八島氏不在に
て古田医師の診察をうけし
にスペイン風邪なりと決定、
されど熱はなしのち前田君
江東義会役員会只今とて来
りしも此躰にて中止すとて
帰る：（後略）：

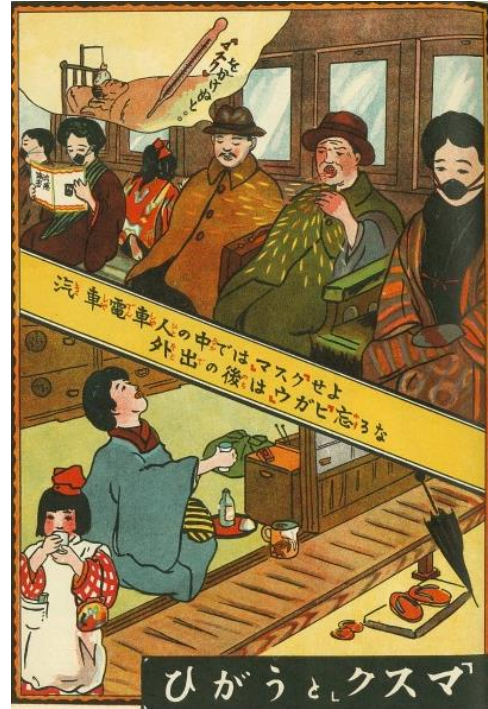
▲ 日記（大正7年）

大曲町長を務めた田口松圃（謙蔵）の日記。大正7年11月15日に長男昌一郎が、12月25日に松圃がスペイン風邪に罹っている。松圃は咳のみで熱は出ていない。現在のよ
うなウィルス検査はないため、診断は難しかったのではないだろうか。（田口松圃家資料）



◀ 町会々議録（大正8年）

大正7年度事務報告の中で、伝染病に関する状況として秋から冬に流行性感冒（スペイン風邪）が流行したことが書かれている。特に小学校で流行したようで、特に流行した学校で臨時休校の措置を取るの
は現在と同じである。（大曲市役所文書）



流行性感冒 豫防 (局生衛省務内)

一、近寄るな—咳する人に
二、鼻口を覆へ—他の爲にも
三、豫防注射を—轉ばぬ先に
四、含嗽せよ—朝な夕なに

出典：『流行性感冒』内務省衛生局（大正 11 年）

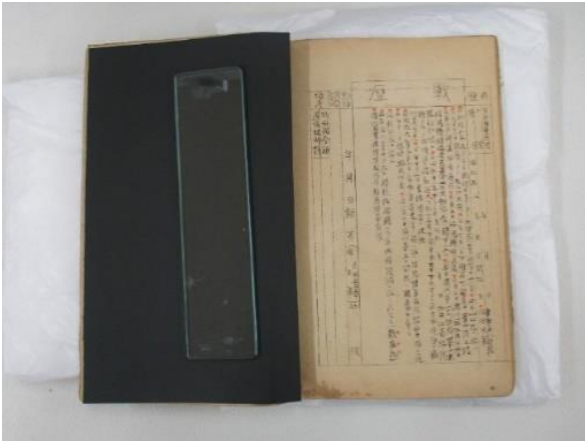
スペイン風邪 日本における流行の状況

流行	期間	患者数 (人)	死者 (人)	患者百人あたり死者数 (人)
第 1 回	大正7 (1918) 年8月 ~大正8 (1919) 年7月	21,168,398	257,363	1.22
第 2 回	大正8 (1919) 年9月 ~大正9 (1920) 年7月	2,412,097	127,666	5.29
第 3 回	大正9 (1920) 年8月 ~大正10 (1921) 年7月	224,178	3,698	1.65
計		23,804,673	388,727	1.63

出典：『流行性感冒』内務省衛生局（大正11年）

戦争と感染症

太平洋戦争における日本軍では、インドネシアのジャワ島や南太平洋ソロモン諸島などをはじめとする占領地域において、マラリアが蔓延するなど感染症に苦しめられた。日本軍の戦没者約230万人のうち、餓死・マラリアなどによる戦病死が約140万人と60%を占めた。



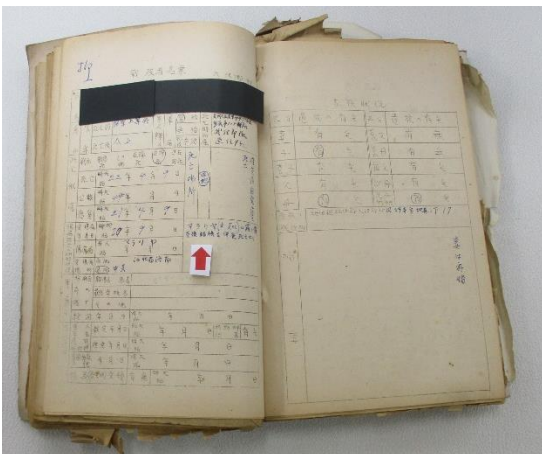
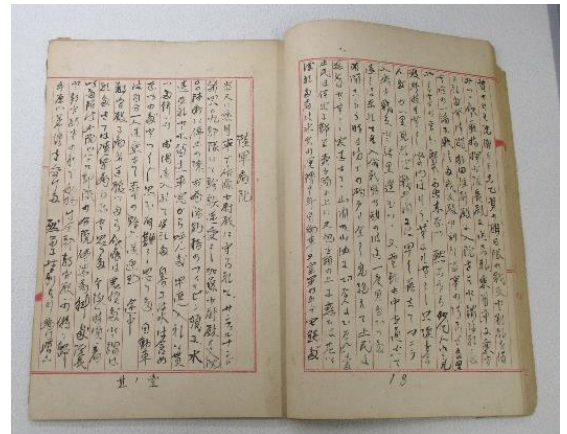
◀ 戦没軍人軍属顕功彰勲録

大沢郷村銃後奉公会（昭和）

戦没軍人の履歴・戦歴等が書かれた記録。戦病死者も多くマラリアや肺結核等の感染症で亡くなる場合もあった。（大沢郷村役場文書）

迎春花日記（昭和18年）▶

フィリピン方面に出征した佐藤徳三郎の回顧録。中国から台湾、フィリピンと移動し、フィリピンでマラリアに罹患したため、後半は陸軍病院での療養日記となっている。（佐藤徳三郎資料）



◀ 戦没者名票綴（昭和）

戦没者の個別票。死亡状況が記されており、マラリアに罹患し、復員後に結核を併発して亡くなったことがわかる。（大沢郷村役場文書）

恙虫病（ツツガムシ病）

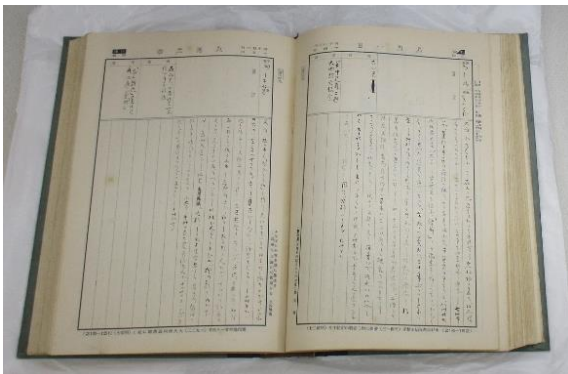
「恙虫病」とはダニの一種である「ツツガムシ」を媒介に感染する感染症のこと。感染すると、強い頭痛・全身の倦怠感・高熱などが症状として現れる。

「古典型」と「新型」の2種類があり、特に「古典型」と言われる「アカツツガムシ」を媒介とするものは、信濃川（新潟県）・最上川（山形県）・雄物川（秋田県）周辺で特に見られる風土病とされ、治療法もなく死に至る病として恐れられていた。

河川の洪水の後などによく感染者が見られることから、ドイツの医師によって当初は「日本洪水熱病」と名付けられた。しかし、その後ツツガムシが原因ということが分かり、「恙虫病」と呼ばれるようになった。現在では治療法は確立されたものの、ワクチンなどの予防方法は開発されていない。

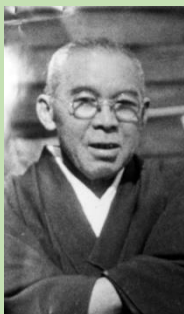
出典：国立感染症研究所『ツツガムシ病とは』

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansenohanashi/436-tsutsugamushi.html>



◀ 日記（昭和11年）

8月1日に田口松圃が赤川菊村とともに寺^{てら}邑^{むらせいとく}政^{せいとく}徳^{とく}を訪ね、恙虫研究所を見学した際の日記。緒^お方^{がた}規^{のり}雄^おのことにも触れられている。（田口松圃家資料）



寺村 政徳（1886～1962）

明治19（1886）年大仙市（旧大曲市）に寺邑家の6代目として誕生。昭和8（1933）年に自宅に「恙虫病研究所」を設置し、共同研究を進めていった。寺邑が患者から血液を採取したものが、累代接種法に使われた。その後も診断方法や治療法など、様々な研究を緒方や息子と続けた。

昭和30（1955）年に藍綬褒章を、昭和32（1959）年に秋田文化功労章を授与される。昭和37（1962）年1月31日に76歳で死去。



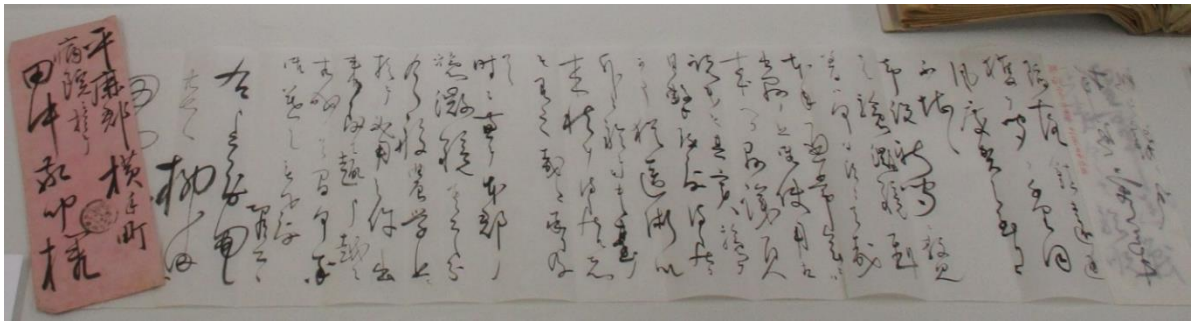
恙虫病研究所

寺村政徳によって建てられた研究所。平成3年に市の文化財に指定。

緒方 規雄（1887～1970）

明治20（1887）年東京にて誕生。細菌学者であった父緒方正規のもとで学び、ツツガムシの研究に同行。その後、毎年夏になると大曲の寺邑家に泊まり、ツツガムシの研究をした。

寺邑政徳の協力により、初めて研究室に病原を持ち込むことに成功。その結果、ツツガムシ病の病原を明らかにした。発見者である緒方は、リケッチア・ツツガムシと発表した。昭和45（1970）年2月6日に83歳で死去。



▲ 書簡（明治 27 年 11 月 27 日）

榊田清兵衛からたなかけいすけ田中敬助に送られた手紙。田中がドイツから取り寄せた顕微鏡はいつ頃届くのかと聞き、田中の実験を見学しに県議会議員数名で訪ねたいと書かれている。（高階家文書）

田中 敬助（1862～1945）

文久 2（1862）年湯沢市にて誕生。公立横手病院院長などを務めながら自宅に「日本沙にほんツツガムシ 蠱病研究所」を設置し、当時はケダニと呼ばれていたツツガムシの研究に着手した。

論文「日本洪水熱病原研究第一回報告」において、この病気を媒介しているのが「ケダニ」とであると断定し、刺し口を発見するのが最も重要であると指摘した。

明治 27（1894）年より秋田県から公的な支援を得て、ドイツより撮影機能付き顕微鏡を取り寄せた。その後、50 歳で医学博士にもなったが、昭和 15（1940）年「日本沙ツツガムシ 蠱病研究所」を閉鎖。翌年の昭和 16（1941）年に発表した論文を最後に研究に終止符を打った。昭和 20（1945）年 83 歳で死去。

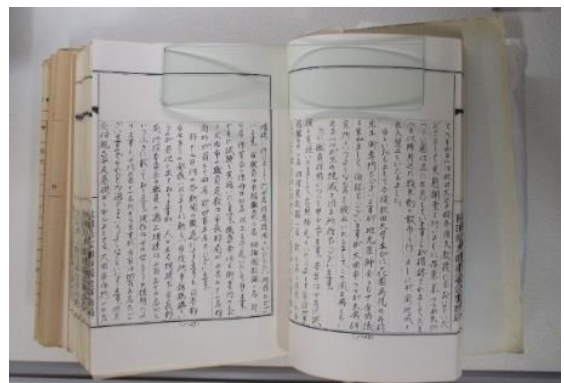


◀ 市議会会議録（昭和 51 年）

昭和 51 年 6 月 17 日から 9 月 25 日に行われた大曲市議会の記録簿。同年 8 月に行われた花火大会で観覧者がツツガムシ病にかかったため、言及されている。（大曲市役所文書）

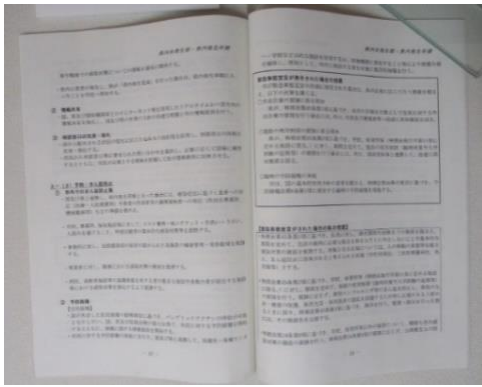
会議結果報告（昭和 53 年）▶

昭和 53 年に行われた大曲市議会の結果報告。ツツガムシへの対策として殺虫剤や立ち入り禁止措置をしていること分かる。（大曲市役所文書）



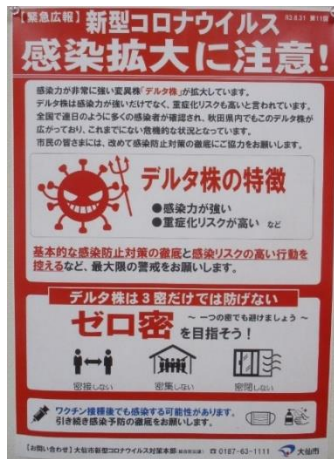
ツツガムシ病・寺邑政徳 関連年表

年号（西暦）	ツツガムシ病関連	寺邑政徳関連
江戸時代後期	角間川の医師、大友玄圭が雄物川近辺で発生する風土病の原因が「ケダニ」とであると発見する	
明治12（1879）年	ベルツが「日本洪水熱病」として発表	
明治19（1886）年		寺邑政徳 誕生
明治23（1890）年	田中敬助が「日本沙蠱研究所」を設置	
明治25（1892）年	田中敬助がアカツツガムシの幼虫が病気を媒介していることを発表	
明治27（1894）年	田中敬助が秋田県からケダニ病研究を委嘱され、公的に支援される	
明治40（1907）年		政徳の父、貫三が死去
大正2（1913）年	田中敬助が「日本沙蠱病の研究報告」を発表し、医学博士に	京都府立医学専門学校を卒業し、順天堂医院に務める
大正5（1916）年		秋田に帰郷
大正6（1917）年		緒方規雄と知り合い、共同研究を行う
昭和2（1927）年	緒方規雄が「家兎累代接種法」を考案し、病原菌を保存することに成功する	
昭和4（1929）年	緒方規雄が感染した兎からツツガムシ病の病原体の形態を明らかにする	
昭和5（1930）年	長与又郎が「リケッチア・オリエンタリス」が病原体であると発表	
昭和7（1932）年	緒方規雄が「リケッチア・ツツガムシ」が病原体であると発表 川村麟也が「リケッチア・アカムシ」と発表 長与・緒方・川村らがツツガムシの研究成果により浅川賞を受賞	
昭和8（1933）年		「恙虫研究所」を設置 千葉医大に恙虫病研究論文を提出し博士号を付与される
昭和10（1935）年		秋田県知事賞を受賞
昭和22（1947）年		脳梗塞のため、息子、誠祐が医院を継ぐ
昭和23（1948）年	アメリカの雑誌で「リケッチア・ツツガムシ」が使われる 米軍 30 名が倒れ、新型ツツガムシ病によるものであると確認される	
昭和31（1956）年		藍綬褒章を受賞
昭和32（1957）年	緒方規雄が第 1 回野口英世記念医学賞を受賞	
昭和34（1959）年		秋田文化功労章を受賞
昭和37（1962）年		寺邑政徳 死去
昭和39（1964）年	ツツガムシ病の届け出が減少傾向に	
昭和50（1975）年	ツツガムシ病の患者が再び増加傾向に	
平成2（1990）年	多村憲が病原菌を他のリケッチア細菌と違うことから新属として、「オリエンティア・ツツガムシ」に改名することを提唱	



大仙市新型コロナウイルス等対策行動計画 (平成 27 年 12 月)

平成 21 年に確認された新型インフルエンザについて、大仙市において策定された対策。現在の新型コロナウイルス対策とほぼ同じであり、新型コロナウイルス対策に応用したことがわかる。(大仙市行政刊行物)



区分	補償したい内容	事業名	概要	お問い合わせ先
個人・世帯向け	1.0万円の給付を受けたい	特別定額給付金	4/27より10万円給付を開始。5/27より10万円給付を開始し、10月31日までの期間に10万円給付を実施する。10月31日までの期間に10万円給付を実施する。	市民生活課 (53-5950)
	児童手当を受けたい	児童手当	児童手当を受けたい。児童手当を受けたい。児童手当を受けたい。	市民生活課 (53-5950)
	生活資金に困っている	緊急小口資金等の特例	生活資金に困っている。生活資金に困っている。生活資金に困っている。	市民生活課 (53-5950)
	市民税・固定資産税・国民健康保険料等が滞りやすい	納税の猶予・減免	市民税・固定資産税・国民健康保険料等が滞りやすい。市民税・固定資産税・国民健康保険料等が滞りやすい。	市民生活課 (53-5950)
	上下水道料金を滞りやすい	上下水道料金の支払猶予	上下水道料金を滞りやすい。上下水道料金を滞りやすい。上下水道料金を滞りやすい。	上下水道課 (53-5950)
事業者向け (個人・法人)	相談したい情報を知りたい	新型コロナウイルス大規模事業支援相談センター	相談したい情報を知りたい。相談したい情報を知りたい。相談したい情報を知りたい。	市民生活課 (53-5950)
	業績が悪化し売上減少・休業要請に悩んでいる	特別定額給付金	業績が悪化し売上減少・休業要請に悩んでいる。業績が悪化し売上減少・休業要請に悩んでいる。	市民生活課 (53-5950)
	従業員に休んでもうけない	雇用調整助成金の特例	従業員に休んでもうけない。従業員に休んでもうけない。従業員に休んでもうけない。	市民生活課 (53-5950)
	テナント等の滞りに対する支援がほしい(飲食店等)	大粒・小粒スタートアップ支援	テナント等の滞りに対する支援がほしい(飲食店等)。テナント等の滞りに対する支援がほしい(飲食店等)。	市民生活課 (53-5950)
	資金繰りのための融資を受けたい(中小企業融資資金)	融資維持特例小口融資	資金繰りのための融資を受けたい(中小企業融資資金)。資金繰りのための融資を受けたい(中小企業融資資金)。	市民生活課 (53-5950)

新型コロナウイルス対策 (令和)

令和 2 (2020) 年から流行がはじまった新型コロナウイルスに対する大仙市の取り組み。行動制限の呼びかけやワクチン接種、経済対策など、現在まで様々な施策が行われている。(大仙市行政刊行物)

新たな感染症とのたたかい

人類の歴史は、感染症との闘いの歴史でもあるといわれている。人類の営みが狩猟採集生活から農耕生活へと移行していくとき、家畜化した野生動物が発生源となったものもある。人が行き交う交易や布教、戦争などにより、様々な疫病は世界中に広がっていった。

そんな中、ペニシリンなどの抗生物質の発見やワクチンの開発は、感染症の治療を劇的に改善していく。1980 年には WHO (世界保健機構) による天然痘根絶宣言がなされ、他の伝染病も克服できるかのように考えられた。

しかし、そのほかの感染症は根絶されないまま、エイズ、エボラ出血熱や、SARS (重症急性呼吸器症候群)、MERS (中東呼吸器症候群)、そして、新型コロナウイルスと、新たな感染症が次々と現れ、現代社会においても私たちの生活を脅かしている。

私たちは感染症と共生しなければならず、次の新たな感染症に備えていく必要がある。

参考文献：山本太郎「疫病と人類」